

《2017年11月（通算255回）月例会報告》

\*\*\*\*\*

# TOKYO2020オリンピック・パラリンピックと 漫画の世界

小林勝海（株式会社漫画家学会）

\*\*\*\*\*

【日 時】2017年11月24日（金）19：00～21：00（終了後は近くの中華屋で懇親会～0：00ごろ）

【会 場】筑波大学附属高校3F会議室（〒112-0012東京都文京区大塚1-9-1）

【参加者（会員・メンバー）9名】

安藤裕一（(株) GMSSヒューマンラボ）、川名紀義（(株) ページ）、岸卓巨（日本スポーツ振興センター）、小山基彰（ヒーローインタビュー）、笹原勉（日揮（株））鈴木稔（オーシャンズジャパン株式会社）、中塚義実（筑波大学附属高校）、守屋俊秀（世田谷サッカー協会）、吉原尊男、

【参加者（未会員）10名】

長伊藤政則（太陽インダストリーアフリカ）、今西智津子（筑波大学附属高校）、江尻章（株式会社漫画家学会）、木所聡（文京区立柳町小学校）、国島栄市（ビバ！サッカー研究会）、小林勝海（株式会社漫画家学会）、中西正紀（(株) 古今東西社）、道端寿奈（足立区立舎人小学校）、守屋佐栄（無職）、Alejandro Parra Gaete（Universidad San Sebastian（チリ））

【報告書作成者】守屋俊秀

【目 次】

- 1) 自己紹介
- 2) 紙芝居活動について
- 3) 漫画とTOKYO2020オリンピック・パラリンピック
- 4) フリーディスカッション（1から3の間の質疑応答もここに掲載した）

## 1. 演者の自己紹介

- ・1963年、墨田区のセーター工場の子として生まれる。
- ・職人に囲まれて育ち、大学で体育会のキャプテンを務めた履歴によりワールド入社。
- ・6年後に家業を継ぐも3年後に独立、さらに現在の漫画家学会の前身であるアイ・エフ・ビーという繊維製造卸の会社に就職。
- ・アイ・エフ・ビーは伊藤忠商事の社内ベンチャーで立ち上がった会社で、そのため中国に人脈があり、上海テレビ大学から日本の漫画家招請を依頼されたのが漫画業界との最初の関わりらしい。
- ・ハイアールが社員教育の一環として漫画を使い、それをきっかけに京都精華大学の学長からの依頼で、漫画家に仕事を創出する会社を立ち上げた。その時から自分に関わっている。
- ・2009年、「紙芝居師」という職種の正社員を公募したところ、大阪で150人、東京で300人の応募があった。リタイア組が多いかと予想したが、声優、俳優など表現を職業とする人の応募が多かった。
- ・マスコミが面白がって取り上げたため、テレビ生出演中に最初の仕事の依頼が来た。

## 2. 紙芝居活動について

- ・最初の事務所は渋谷だったが手狭になったため、荒川区、熊野前商店街に移転。区が観光資源と認めて応援してくれた。その縁で東京商工会議所荒川支部の会長さんたちと懇意になれた。
- ・商工会議所がオリンピック・パラリンピック招致をしており、紙芝居作成の打診・依頼を受けた。突貫工事で作成し、まずは荒川区で高評価を受け、ついで都庁の招致委委員会、300人の評議委員の前で、紙芝居師が15分の実演をした。



(ここでその時の動画を上映)

- ・招致委員会、水野会長に認められ、正式にオフィシャル団体となった。以後、手元資料にあるように、実績を積んでいる。
- ・招致委員の依頼や、自分自身がPTA活動をしていたこともあり、半分以上は学校。
- ・総数は数百回になるが、半分以上は東北。石巻市の学校や仙台市七夕祭りでも実施した。東松島市の赤井南小学校に根木さんというパラリンピックの伝道師みたいな人がおり、大変に感化された。私がパラリンピックの招致に傾注しているのも、この根木さんからものすごい影響を受けたから。
- ・いよいよ開催国決定。ロケ会長、有名なあのトキョーのシーン。



(動画上映)

- ・オリパラとは離れるが、海外での紙芝居上演について。代表が元商社マンだったので、クールジャパンだの、海外志向はあった。会社を作った年からヨーロッパ最大のジャパンフェス、ジャパンエキスポに出展していた。
- ・強力なパートナーとして手塚プロダクションと事業提携している。そこから手塚作品を紙芝居で世界に伝えたいというご依頼をいただいたのがまず最初の海外。鉄腕アトムとジャングル大帝、不思議なメルモ、この3本についてはまあ年間契約で使用料を払って、オリジナルで紙芝居をやらせてもらっている。
- ・海外でやるときは当然現地の言葉だが、日本語を聞きたいお客様もいるので織り交ぜながら公演をしている。
- ・観光庁、経済産業省などとも組んだインバウンド関連のミッションもある。
- ・また、漫画で町おこしをしている自治



体が沢山あり、点での活動を面にしようということで、NPO法人日本マンガ・アニメトキワ荘フォーラムおよびトキワ荘フォーラム連絡協議会が活動している。

(オランダ公演の動画上映)

- ・オリパラ、特にパラに戻る。招致活動期間中にロンドンオリパラが開催された。その前後で日本国民の関心の度合いが変化したのは肌で感じた。
- ・しかし、金メダルを獲得したゴールボール女子の国際親善試合の観客数の少なさに怒りを覚え、怒りを企画書に転化させて渋谷区に出した。結果、渋谷区と随意契約を結ぶに至った。
- ・現在渋谷区では4競技についてオリジナルで紙芝居を作っている。11月29日が東京パラリンピックの千日前ということで、その機運醸成の事業の一つとして、渋谷駅前の憲章ボードで今これが掲載されている。
- ・このイラストが缶バッジになって区民がリアル観戦事業だとか区主催事業に参加されたときに配られている。また、現在、区立の小中、公立の幼稚園、保育園、大体年60回くらい、プラス渋谷区民祭りや区主催事業で紙芝居をやらせてもらっている。



### 3. 漫画とTOKYO2020オリンピック・パラリンピック

- ・文化プログラムを意識した事業を計画した。文化プログラムは、非営利団体しか申請出来ないが、会社の顧問が公益財団法人日本漫画家協会の常務理事をやっているのので、協会の事業として手を上げる。
- ・開催国決定の夜、非常に魅力的な基調講演をされた大学の先生がいて、私が先生に興味を持って近付いた。その先生からマンガでオリンピック歓迎事業をやったらと持ちかけられた。
- ・自社でNPOも持っているし、トキワ荘フォーラムもやっているし、京都精華大学ともつながりがあるし、軽い気持ちで動き始めた。岸さんや安藤さんにも助力頂き、いろんな人を紹介されて会った。またオフィシャルスポンサーや自治体にも会ったが、金が無い、検討する、ばかりで今日に至る。専従を最低でも3人雇用する体力が必要である。
- ・国際パラリンピック委員会が開発したI'm POSSIBLEが全国に配られている。理想は自分たちで作ったオリパラの教育教材を日本中の子供たちに配りたい。しかし、現実には頓挫状態である。
- ・計画の概要として予算規模3~5千万、柱の一つはマンガコンテスト。本来のスケジュールであれば今は公募中、開会式までには公開はせず。行政と付き合えば5年かかるとも言われたが、それでは東京オリパラは終わってしまう。
- ・経済的な理由だけで実現できないというのは悔やんでも悔やみきれない。

### 4. ディスカッション

#### 1) 2020 東京オリパラについて

中塚：ここ（開催地発表視聴会場）にいる人って？

小林：これはオフィシャルスポンサーです。5階が国会議員で。5階と二つ会場があって、東商のほ

うはオフィシャルスポンサーです。

守屋：渋谷で制作された4競技は渋谷で開催するのですか。

小林：車椅子バスケット以外は渋谷区で開催されます。プラス、ハンドボールも渋谷区で開催されます。

## 2) 紙芝居について

中塚：紙芝居って我々が子どもの時の文化のような気がします。一般的に紙芝居はいまの時代、日本では国内的にどうなっているのでしょうか。

小林：正しい統計は誰もとってないのでわからないですし、プラス、ボランティアさんが非常に多い文化です。いわゆる教育現場でやられている読み聞かせの紙芝居、教育紙芝居は出版大手でも年商10億位の市場規模です。

公園で子どもたち集めてやってたのは街頭紙芝居というんですが、戦後、昭和32年がピークで、3万人いたらしい。復員兵の人たちの職業だったらしい。ところが昭和58年に道路改正法と食品衛生法で、公園でモノ売っちゃいけないとなり、紙芝居師さんは収入の手段を絶たれてしまった。ですからそこから一気に激減です。

守屋：図書館ではいま、紙芝居必須です。非常に根付いています。個人で借りて行って、家で読んで。紙芝居師さんたちはいなくなったけど、紙芝居そのものは日常生活に残ってます。

小林：今年渋谷区で作った4作、それぞれ10部づつ複製して、渋谷区内の図書館に配られてます。ハチ公の紙芝居もやっているんですけど、それも出身地大館市の公共施設に全部入ってます。

中塚：オランダに行って紙芝居された映像を見たんですけど、欧米ではどうなんでしょうか。

江尻：紙芝居はピクチャーカードショーといって、ジャパニーズマンガ、アニメーションから入って、紙芝居は全然知らない、わからない。ピクチャーカードショーといっても見たこともないからわからない、という。どうにか呼び込んで、見せたら、若い子は、デジタルインフォメーション、ああすごいと。これ日本の伝統なのか。ちょっと伝統とは・・・でもすごく喜んでもらえて、やっぱりデジタル技術で日本のアニメーション、まだそういう技術がない時に絵で、止まっているアニメーションをやる、その日本のマンガ文化の深さ、そういったところを外国人の方々は感激していた。

小林：冒頭で説明するのを忘れちゃったんですけど、紙芝居って日本にしかない文化です。ヨーロッパはマペットですよ。日本にしかない文化である紙芝居で国際レースを勝ち抜きましょうって招致委員会に持っていった。忘れもしない、襖の文化だから。それを紹介するのを忘れちゃった。

笹原：さっきのオランダの公演はお客何人ぐらい入ったんですか？

江尻：最初のメインステージでは300名、ほんとはじめのオープニングセレモニーの第一番を飾った。最後のほう、サブステージでは100名ぐらい。

中西：尺はどれくらいなんですか？

小林：1枚1分。10枚から12枚、公演をしている時間は10分から15分ぐらい。私たち紙芝居ショウという言い方をするんですね。前説があって本編がある。この時は前説はしたの？

江尻：前説は太鼓で。

小林：まず最初は会場を暖めるためにクイズの紙芝居やったり、いまみたいに太鼓で集客したらいいですけど、ショウとすれば30分のショウで。週末はショッピングセンターの集客マシンなもんでから大体30分のショウを1日2回、3ステージでいくら、という商談をしているんです。子どもさんが集中して見られるのは15分がマックスだと思います。なので15分に収まるようにしています。

### 3) 紙芝居の教育的効果

川名：この前伺った話で、厚生労働省が啓発のために、予防接種のキャンペーンのために日本のアニメとかマンガのコンテンツを使っている。一番最初がセーラムーンを使って、検査しないとお仕置きよ、なんて。それがやっぱり日本のコンテンツとか強力だからBBCなんかで紹介されて、一般の人たちの間ではツイッターなんかで、日本のマンガのコンテンツって応用すると強力な力になるんだなど。これもまた3、4日前なんですけど、絵本の読み聞かせというのを聞きに行っていてですね、僕は初めて聞いたんですけど、あれも一種の紙芝居的なもので、パワーポイントで映されて、絵本を映していたんですけど、これはこれで成立するんだと。紙芝居は実体験なかったからわからなかったんですけど、楽しいものなんだということがわかって。日本の、特に手塚プロダクションとかの力を借りたりなんかして、既存のマンガをマンガのまま出せないかもしれないけど、紙芝居という新しい形のものを落とし込むことによって展開させられるというのは何かすごく新しいなど。マンガとかテレビアニメとかの体験を、その場限りの紙芝居という、その空間だけの体験に落とし込むというのはすごく新しいんじゃないかなと思いました。

小林：私たち商業施設の人間なんかは、ライバルはいかに子どもたちからゲームを奪うかですよ。あれがライバルですよ。先ほどの厚労省さんの話もそうですけど、外務省もゴルゴ13使ったり、まあいっちゃ悪いんですけど考えなくていい、お金があるところはそれするんですよ。完璧に著作権ビジネスですから、その部分は。版元がOKといったらOKなんです。そこは手を出せないですね、我々は。そこは大手広告代理店さんのお仕事だから。

逆に昨年度やったやつで、総務省消防庁さんから飛び込みでご依頼頂いたんですが、救急車の適正利用、これを園児に伝えたいっていうんですよ。全国の園児に伝えたい。結論で言うと、一本しっかりした作品を作って、たとえばそれを増刷して全国に配ればいいんでしょうけど、当然コストがかかりますね。じゃあデジタル化しましょうと。ということで、ウェブ動画にしました。紙芝居動画にしました。ダウンロードして見られる状態にして納品をしました、拡散していただけるように。予算がある先方様なら。銭湯のPR事業やっているんですけど、お風呂の入り方マナーという紙芝居を、それは増刷して全国に配ってます。発注元の考え方なんです。デジタル紙芝居。総務省の「きゅうきゅうしゃのきゅうすけ」っていうのを、さわりだけ、アタマとまんなかと最後を。

(デジタル紙芝居上映)

小林：全員声優です。うちでは紙芝居師っていいんですけど、全員声優です。動かないアニメーションですよ。これを幼稚園の現場で使って頂いてると聞いています。

中西：コスト面で、今のそのアニメだったら5分程度のものだと思うんですけど、そのうち画像は何枚作られていますか。それでコスト的に5分のアニメーションと、5分でしゃべれる程度の紙芝居制作というのはどれくらい違うんですか。

小林：ぶっちゃけ2桁違います。お客さんとの相談で、1千万以上予算があるときはフルアニメーションをお勧めするし、100万前後の時はパラパラアニメをお勧めするし、100万も無理だってことなら、いまのやついきますか、と。それこそ松竹梅のコースを用意してプレゼンをさせてもらっています。そもそも紙芝居1本はしっかり作らなきゃいけないんです。

中西：コストとしてはシナリオを作って声優さんを手配して画像の制作を手配するということまで是一緒だけど、制作枚数がおそらく千枚程度のものと数枚のものではどかっとう違う、そういうことです。

小林：そうです。すべてアナログですから。制作業務は。

#### 4) 2020 オリパラ漫画プロジェクトの現状と課題

中西：漫画家協会がオリンピックムーブメントに積極的には関与できないという状況で、プロジェクトもうまく動いていないとなった中で、じゃあ2020年に関して漫画面での広報や活動というのは現時点では組織委員会の方ではどんなことをやってらっしゃるんですか。

小林：組織委員会がマンガってというのは、私が知っている範囲ないです。組織委員会というよりも、東京都オリパラ準備局さんがおやりになっている障害者スポーツ普及啓発事業で「Be The HERO」ってのがあるんですね。それを見ていただきます。なんでもっとプロモーションしないんですかって聞いたら、予算が作っておしまいだったって。なんでだあ、ですね。

「Be The HERO」動画上映：[https://www.sports-tokyo.info/be\\_the\\_hero/](https://www.sports-tokyo.info/be_the_hero/)

小林：こんな素晴らしいものを、東京都は作ってたんですね。わかりやすいですね、障害者スポーツへの入り方として。やっぱマンガ、音楽を使って関心を引こうという。ところが作っておしまいだったって。だから私たちはイベントで広げますよ、せっかく海外に行っているんですから、じゃあ海外に行って東京オリンピック・パラリンピックの応援をしますよって言うんですか。聞いたら、国際登録してないからダメだと言うんです。はあ？ 去年はそう言われた。国際登録してない？ ええ？ びっくりした。私が知っている範囲でマンガを使っているオリパラムーブメントは、現実に動いているのはこれかなあと。

中西：マンガ界においてオリンピックに対する警戒感ってかなり強い。一つはコミケがらみで、ビッグサイトが使えなくなるっていう問題がある。社会浄化っていう名目で創作規制がかかるんじゃないかっていう。スポーツ関係からは見落としがちなことなんで。そこを、いやそうじゃなくて、文化プログラムとして、ちゃんとその二次元のものも大事なんだって事を、どうやって伝えていくかってことを、これはやる方のスポーツ界から打ち出していき、組織委員会がこんな調子で動けないんだったら、何か搦め手で動いていく方策を考えなきゃいけないのかなあってことを、今の話も伺いながらさらに思っていました。

岸：先ほど3千万から5千万予算がかかるっていう、これは年間ですか？

小林：最初8ヶ月を試算ときに、大体ランニングコスト3千万ぐらいかなあ、まあ常駐3人とみて事務所だなんとか経費だとか、ホームページの立ち上げから。ほんとに概算です。

岸：もう一つ。このお金があったらできるものなのか。あるいはもうオリパラってタイトル使う時点でスポンサー規制が出てきてしまう。いま組織委員会も応援プログラムや参画プログラムという形で一般公募もしていますが、お金があればいいのか教えてください。

小林：お金があればできますね。ちゃんとチェックできるプロがいるので。あとはそれに張り付いてがんばってくれるスタッフですかね。ある程度、行政さんはあとからついてくるんじゃないですかね。ばあっと走っておいて、どうですかって言ったらたぶん乗ってくるんじゃないかなあと思いますけど。組織委員会の正面突破ってどうでしょう、ちょっと。やってないからわからないし。ここだけの話にさせていただきたいんですけど、ようやく電通さんの土俵に上がったんです。色んな意味でこれからチャンスが。来年度予算のところのうちらみたいな、ようやくです。

伊藤：オリパラの告知とか、招聘とか盛り上げようってなってますけど、実際の2020年オリパラとの関連性、スポーツ大会との関連性は何かあるんでしょうか。前段階はいいんですけど、本戦のときにこれに参加した人はなにか特典とか付くんですか？

小林：マンガコンテストですか？オリパラマンガのことですか？えーと、そこまで具体的な落とし込みが実はまだできてなくて。たとえばこの中には賞金とか出てないんですよ。大賞は百万円あげますとか。作家としてデビューをしてもらいましょうとか、出版をしましょうとか、そういうフックにしようと思ってるんですけど。スポンサーがないので金目の話がここでできないんですよ、いまは。ということは大会期間中どうしましょう、ああしましょうってことは、こういうふうにしたいねってことは言えるんですけど、こうしますっていうことは、いまの段階ではやりにくいところがあります。ただ考えられるのは、オリが終わってパラが始まるまで2週間あるんですね。ここで何もしないのはおかしいよねって。当然ながら国民の関心は一気に引きますから、オリが終わったら。ということはパラリンピックに向けたムーブメントをこの2週間で一気にやろう、一番暑い時ですけど。そこでどうするのかっていうことは。もう一部の人たちが動き始めているのは聞いてますけど、我々はもっとそこに集中すべきだと思っています。大会期間中の関わり方に関しては、ちょっと即答ができないですね。こうしますってことは言えないですね。

伊藤：このプロジェクト自体にオリパラのマークを使ったりっていうのは可能なんですか。

小林：無理だと思います。公式エンブレムは100パーセント無理だと思います。残念ながら。たとえばオフィシャルスポンサーさんが認めてくれたらできると思うんですけど、じゃあ5千万、1億出してくれますか、という話ですよ。でも教育、東京都教育委員会の話はこれから始まるころなので、これもちょっと入れてみようかなと。いま紙芝居のところそんな話になっているので、これもちょっと入れてみたいなと思ってるんです。教育フォーラム、ただそれは東京都内に限るんですよ。いきなりでかく考えちゃうからダメだったのかもしれない。

伊藤：オリンピックスポンサーに営業はかけてないんですか。

小林：直接はまだやってないです。

安藤：毎日新聞へのアプローチはどうでしたか？

小林：営業というか、まあ連絡先はいっぱい知ってますけど。

中西：オリンピックパートナーとしてスポンサーに入っているところで、新聞が三大紙プラス日経が入っているのは知ってるんですけど、ほかの広告出版関係だとどこが入ってるんですか？電通、電通以外だと出版関係はどこですか。

小林：大日本さんですね。紙モノ、印刷でいうと。

伊藤：すごく安易な考え方ですけど、クラウドファンディングという手法はなかったですか。

小林：なかった、ないですねえ。

伊藤：日本にたくさんいますよね、漫画家の卵。相当いるのでその人たちから少しずつでもお金集めれば、3千、5千の単位であればいける気がするんですけど。

小林：漫画家から集めるんですか。

伊藤：はい、自分たちで盛り上げようと。ただしオリパラ本戦、本大会自体の時に、開会式に対象者の人たちを、入場券がきちっと付いてくる、そこまで何か与えればいける気がします。もちろん企画次第ですが。

小林：その企画なんですよ。

伊藤：本戦とのからみを何か付けてあげることで。

小林：僕の根っこにあるのは、野球のたとえ話なんですけど、マンガって日本がメジャーリーグだよって教わったことがあるんですね。なるほどな、世界中からまねに来てるんです、マンガを。何か面で発信できるようなことをしたいなあと、期間中に。皆さん来ますよね。日本のマンガを、日本のマンガ産業全体を知ってもらいたいなあと。自国に持ち帰ってうまく、自分のところの国にバーチャルに使ってもらいたいなど。そこまで考えが広まっちゃってるんです。クラウドファンディング、漫画家さんから金を集める。幸か不幸か私の周りにはいる人、みんな金がないんですよ。

伊藤：まあ一口あたり安くていいと思うんですよ、千円だ5千円だと。学生の漫画家だっていっぱいいるし。で、英語サイト、フランス語サイト、スペイン語サイト、各国の言葉のサイトでやれば世界から集まりますよ。

アフリカでも漫画家やりたいって人沢山いるんです。ナイジェリアでもブルキナファソでも。ケニアにもウガンダにもいますからね。やり方次第で集まるような気がする。

小林：どこから入ってます？ アフリカへ、マンガは？



伊藤：アフリカへですか？ 中国人です。

小林：ですよ。やっぱそこ中国人なんだ。

中西：参考になればと思うんですけど、いまちょっと調べて。クラウドファンディングでマンガのスマホゲームのかけたっていう団体さん、プロジェクトが出てまして、それが設定70万で300万弱、296万集まってきました。サポーター300人だそうなんですけど。でもやっぱりおそらくマンガで集まるとなってくると、まあ7桁（百万単位）なのかなあ、二、三千万ってなってくるとわからないなあ。

伊藤：だからこそオリパラ本戦、本大会との関連性ができないかなあと思ってるんです。単純にマンガを作って集めようっていうのではなくて。そこはもうアイデアベースですよ。

小林：そこは広告代理店ですね、安部さんにスーパーマリオさせた人がいるじゃないですか。あの辺のクラスの人とやっとなないと、入り口からそういう話しとかなないと。でもいいヒントももらいました。そうか、あの人としゃべればいいんだと、いま思いました。組織委員会じゃないですよ、代理店なんです。その企画書の中に入らなければだめですよ。いい話聞けました。

安藤：Alejandroに代わって質問させてください、政府だとか地方自治体からお金持ってくるというのは可能性あるんですか？

小林：今のところ全部断られました。逆に、来年度、30年度予算のところかというと、年明けの議会に出すために必死になって、いまやってる最中じゃないですか、お役人さんたちが。もしかしたらタイミングは今かもしれない。そういうことがわかったのって、今でこそしゃべれますけど、ほんと2、3年前までは分かんなかったんですよ。タイミングが。行政のお金の回し方がわからなかった。

安藤：オリパラも年間予算持ってますよね。あれ、どういうふうに使われてるんですか。

岸：国際協力のほうだったらわかるんですけど。国内でのオリパラ教育、それこそ学校でやられてたりとか、あれはどういうお金の動き方をしてるんでしょうか。

中塚：全体の枠は決まっていますね。東京都は別枠でやっているけど、オリパラ教育をやろうとする都道府県が増えれば増えるほど、それぞれの県に落ちてくるお金は減ってくる。

岸：国主導で全国にっていうのはあんまりない？

中塚：その事業は筑波大学が管理機関となっており、私も関わっています。今年は筑波大学、早稲田大学、日体大が取りまとめ役になって、それぞれがいくつかの都道府県のアドバイザーとなってオリパラ教育を進めていこうというプロジェクトです。参加する県が増えてくるのはよいことだけれど、さっきも言ったようにかかわる県が増えれば増えるほど単価が減って。全体枠が増えていく訳ではない。

## 5) オリパラムーブメントを「盛り上げる」とは

笹原：全然角度が違う話なんですけど、オリンピック・パラリンピックムーブメントを盛り上げると

のことで、盛り上がるってことはどういうことなんですか。

小林：より関心を持つ人が増える。これは個人的な意見になりますけど。全員が賛成じゃないですよ、決して。東京オリンピック・パラリンピックに対しては。ただ仮に61パーセントが関心があるんであれば62パーセントになっていただきたいし、62や63になっていただきたい。結果、なんでしょかね、レガシー。突然耳ざわりのいい言葉が出てきますけど、そんな難しい話じゃなくて、2回目をやった意義がそのまま残ってくれたらいいのかなあと。自分ごとですよ、誰かにサービスを提供してもらわなくて、自分から参加してオリパラに関わることによって自分の人生が変わって行ったという、個人的にはそうあって欲しいと思ってますけど。私も最初は日本が2016招致で150億使って、東京が150億使って負けて、舌の根も乾かないうちにまた2020年か、おいおい。どちらかっていうと反対論者でした、私も。でも自分ごとになったら問題がいっぱい浮かび上がって、ああこんなこともやらなきゃいけないんだってことがわかって、やれることがこんなにあるんだってこともわかった。

笹原：私は、オリンピックでいろいろな競技が日本で開催されて、試合を見られて楽しいなっていう気持ちがあるから非常に関心はあるけど、それ以上ではない。東京大会といっても、まあほかの国での開催じゃないから時差がなくて見やすいな、ぐらいの話です。サロン2002でも、ワールドカップ2002年を成功させるってどんな話か、どうなったら成功か、という議論もしました。意地悪な言い方になっちゃいますけど、じゃあみんなが関心持ったら何がいいの、というような疑問もちょっとあります。で、盛り上げることで、何を狙っているのでしょうか？

中塚：本質的な話ですよ。けどすごく大事なこと。

伊藤：ちなみにその2002年のワールドカップのときは何をもって成功としたんですか。

笹原：人々の暮らしの中にスポーツというものが根付く、ということを目指にして、根付いたら成功だというふうに考えました。なので、まだ根付いてないから我々まだサロン2002と名乗ってます。(笑) いつまでもスポーツを通じたゆたかなくらしづくりを目標に掲げています。

中塚：「ゆたかなくらし」っていう、ちょっと漠然としたキーワードを置くことによって、永遠の課題になるわけです。どうなったらゆたかなのかなという物指しは、数値目標を作ればできるかもしれないけど、そういうもんじゃないからね。ちなみにNPO法人化する時に、名前話も、半分冗談ですがちょっと出ました。サロン2002の数字の順番を変えて2020にしようかっていう話です。でもやっぱり2002ですね。

中西：象徴的な話ですよ。02から20ってのは、ある意味では。

中塚：あの頃は「ボランティア」って話もなかったからね。

## 6) オリパラ教育予算とその活用の現状

道端：予算のことでお聞きしたいんですけど、オリパラ決まってから、東京都のオリパラ教育の予算って、はじめが25万だったんですね。去年が24万で今年が23万。だんだん、2020年に向けて減っていくというふうに、東京都の教育委員会ではそういう設定をされているのが現状です。担当と

しては子どもたちにできるだけたくさん、オリンピック、パラリンピアンとか、それを支えている周りの人たちと交流させたいって、個人的に思って、いろいろスポーツに関係ある活動に顔を出させてもらっています。6年間板橋にいたんですけど、今年度、7年目で足立区に来てオリパラ担当になったんですけど、その時点で23万の予算で。それも5月に、途中で23万ですって言われて。3月の段階で、たとえば足立区だったらゴールボールの人たちを学校に呼んでオリパラ教育やりますって案内が届いて、それを抽選でどこの小学校でやるかが決まったりして。結局ふたを開けてみたらその人たちを呼ぶだけで21万かかって。お金とは関係なく、公教育の場で話したいっていうスポーツ関係の方が沢山いるので、私はそれをできるだけたくさん、1年生から6年生までカバーする計画を立てたいなと思っていますが、ふたを開けると予算が23万で、区で言われた人たちに21万円。その1日だけで払っちゃうんで、じゃあ残りの3万から2万で誰か呼べないか。そういう話をしています。今年はボランティア精神旺盛な方たちに来ていただいて、なんとか終わりそうなんですけど。来年も引き続き私がオリパラ担当になっているので、例えば今回のマンガ、紙芝居師の方を出前すると、実際にどれくらいの予算がかかるのでしょうか。ホームページで調べたんですけど出ていなかったものですから。はじめに予算がどれくらいかかるのかを分析した上で、計画を2月に出したいなと思っていますので。1回の公演に対してどれくらいの予算が必要かをお聞きしたいです。

小林：この場で言うんですか？（笑）あの、オリパラ教育推進部の前はスポーツ教育推進事業っていう看板があった時代があったじゃないですか。あの時1校100万だったですかね。その代わり1行政区で1校か2校だったかな、担当の学校が。で、ほぼ東京都全域がオリパラ教育推進校になったんで、薄く配分されてるんだろうなあってのが、いまの話を聞いた感想です。お金の話をすると思わなかったんですけど、基本、相手の予算に合わせてやってきています、今までは。ないものをくわって言ったってないものはないし。かといってボランティアじゃないから、まあ交通費程度、それでもできないですね。まあ言われた値段でやってきました。足立区がゴールボールに熱心なのはよくわかっているし、大会よくやってらっしゃるし。足立区の生涯学習センターと私、接点があります。足立区の事業もやっています。1回言ってください、基本的に私は断ったことがないです。とにかく紙芝居が産業化されていないので。絵本って絵本作家になりたいとか、そういう言葉ありますよね。声優になりたいって子いっぱいいますけど、紙芝居師になりたいって聞いたことないです。だから逆に紙芝居師っていう職業があこがれになるように、世の中の役にたっているというぐらいまでは考えているんで。ギャラがあわないからやりません、ていうスタンスはないです。

中塚：なんかほんと、オリパラ教育といわれるものも、予算が付いたからやらなあかんみたいな感じになっていますよね。

道端：教材とかも、毎年3月から4月にすごくオリパラ教材とかもたくさん送られてくるんですけど、結局そのふたを開けるのって10月とかなっちゃって、開けたところで余裕がなくて。教室にいま、私のクラスに置いてるのがゴルゴの安全マップ、災害マップです。それは子どもたち取り合って読んでいいです。クラスに2冊しかないんですけど。なので、マンガでオリパラ教育の教材を作ったら、子どもたちは、本棚に置いてると読むかなあって。いまオリパラ教育の教材を置いても子どもたちは見てなくて。写真ばかりだとか、競技の紹介があるだけで終わりなので、マンガ教材を入れると、特に低学年の子はよろこぶと思います。

小林：ありがとうございます。来週東京都の教育委員会としゃべるんで、いい情報もらいました。教

育プログラムのところで呼ばれたんで。現場の声聞きました。

中塚：子どもたちに紙芝居作らせるのもできるかもしれない。

小林：たまにあります。学校のワークショップで、起承転結の結のところだけ子どもたちに、自分で考えて、自分で描いて自分で演じる。全部違う才能じゃないですか。まず気が付く、考える、描く、演じるって、全部違う才能。それが全部できる子ってまずいないですけど、まずやってみようって動機付けするのが我々の役目と思っているので、紙芝居ワークショップはやります。お題はこっちが作ります。大きなラインはこっちが作りますけど、最後のところだけ、オチを自分で考えよう。カッコよく言えば、紙芝居メソッドっていう言葉をその時使ってるんですよ。漫画家と紙芝居師っていう、まったく異なる人種を抱えている、それが僕の資産なので、そういう人たちを生かすためにはどうしたらいいだろうかということのを常に考えて、例えばいまの紙芝居メソッドとか、例えば海外もそうですし。常に、どう商品化するか考えるのが私の役目です。23万か、ちょっと・まあ100万はほしい・・・

中塚：やっぱり全部の学校でやるんですか。

小林：そうですね、まず校長先生たち、100万どうやって使ったらいいか、困ったなど。

## 7) 2020 へ向けて

川名：マンガで盛り上げようという話なんですけど。マンガを公募して、それを審査して決めようということなんですか？審査員とかっていうのも決めてらっしゃるんですか？

小林：やりたい人いっぱい出てくると思いますね。一応座長、トップは牧野圭一。一コママンガの巨匠って言ったらいいんですかね、近藤日出造先生から受け継いでる、牧野圭一先生がトップですね。先生がいいって言えば協会がいいってことなので。さっきの「Be The HERO」の裏話をさせていただくと、某有名な先生が、ウィルチェアーラグビーの選手の、こういうところを描いたんですね。ウィルチェアーラグビー協会の会長さん、ものすごく穏やかな方なんですけど、無茶苦茶怒ってたんですね。どうしたんですかって聞いたら、基本、車椅子バスケットをやって握力弱くなっちゃった人がウィルチェアーラグビーに来る、だからこんなになんか出来るわけがないだろう、あの人たちは勉強してない、と怒ってた。だから我々、障害者スポーツ、マンガに関わるってことは、そういうところ、最低限のことを知っておかないと、ほんとに世界の笑いものになっちゃう。これはちょっと裏話で個人名挙げるわけにいかないですけど、漫画家協会さんはゼニ儲けでやってないってそのときは聞いたんでね、じゃあ無償だからいいのかって、そういう話じゃなくって。やっぱり障害者スポーツの普及活動に関わる人間、心が大事だと僕思ってるんで。だとしたらやっぱり学ばずだし。ちょっと足りなかったんだろうなあって、ちょっと裏話でございます。怖いすよね。

川名：デザインとか、アニメの力をお借りして、先ほどの厚労省のセーラームーンの後釜で今度はガンダム。ところがガンダムは戦争のためのモノだから、兵器だから。厚労省の宣伝に使われるためにはいろいろそういう。だから盾はいらないとか。

小林：ありますよね。行政さんの仕事に関わるとそういうこと出て来ます。仕方ないです、こればかりは。

川名：僕もクラウドファンディング面白いアイデアだなあと。例えば審査員の先生方の色紙を1枚描いて頂いて、千円入れてくれた人にはその色紙をプレゼントするって感じなのが。するとお金が集まるのかなあとか。クラウドファンディングの会社もいろいろあると思うんですけど、僕みたいなちっちゃな会社のところにもしょっちゅうメール来て、何かネタないですか、ネタないですかっていつも探しているような人たちなんで。彼らはネタを探してきて自分たちの中でそれを大きくスケールできるか相談しながら一緒にやっていくような形なんで。だから計画案なんかすごくでき上がってらっしゃるんなら、眠らせることになるくらいだったら、一度持っていったら面白いことになるんじゃないかと。

小林：なるほどなるほど。わかりました、ありがとうございます。

伊藤：富士フィルムとかリコーとか、そういうコピーメーカーなんか、話の持ってき方では会ってくれる気がするんですが。紙芝居、マンガ、紙ベースなんで。印刷会社、出版会社もそうですけど、切り口としてはコピー機会社ってのもありかなあと。

小林：なるほど、そっちは気が付かなかった、コピー会社。

中塚：やっぱり、やって行きたいですね。

小林：ホントにもったいないとは思ってるんですね。ただ動き始めたら膨大な量になると思うんで、専従者は必要なんです。じゃあ専従者の経費は誰が出すの？ どっから持ってくるの？ そこだけだと思うんですね。結局前へ出して動き始めれば、それこそみんなに喜んでもらえる企画だと思うんで。例えば自分のところの事務所を出すって言うのはもう大いに結構なんです。事務所のこのスペースをお貸しする、というのは。事務所の負担はいらない。人件費なんです。

中塚：ということでそろそろお開きの時間です。あまりこれまでサロンでも取り上げることのなかった分野ではありますが、非常に新しい情報を得たのと、可能性を感じたのと、課題もいっぱい感じましたが、なんとかしていきたいなということも感じました。

今後ともよろしくお願いします。どうもありがとうございました。(拍手)

以上